



Title	韓国の満洲・ツングース語研究 : 第三世代の学者たちの業績を中心に
Author(s)	高, 東昊; Ko, Dongho
Citation	北方言語研究, 特別号, 1-11
Issue Date	2022-03-20
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/84932
Type	departmental bulletin paper
File Information	01_Ko.pdf



韓国の満洲・ツングース語研究 — 第三世代の学者たちの研究を中心に —

高 東 昊
(全北国立大学)

1. はじめに

本稿の目的は、韓国の第三世代の学者たちが満洲・ツングース語に関して研究した業績を紹介することで、今後の研究方向を探ることにある。一般的に学者たちの研究対象と方法はある程度固定される傾向があるため、これまでの研究結果を理解すれば、今後の研究方向が推定できるものと考えるのである。満洲・ツングース語研究としても、範囲を広げれば系統が異なる言語との比較または対照研究、類型論的研究まで含めることができるが、本稿では満洲・ツングース語のみを対象にした研究だけを紹介することにする。また、本稿は研究傾向を紹介するものであるため、具体的な例や評価などは今後の機会に譲る。

韓国の満洲・ツングース語研究者は大きく三つの世代に分類することができる。朝鮮司訳院の清学を論外とすると、第一世代は1920年代～1940年代に生まれた人々であり、崔鶴根(1922年生まれ)、朴恩用(1927年生まれ)、成百仁(1933年生まれ)、金東昭(1943年生まれ)が代表的である。彼らの研究業績は1950年代から1990年代までに発表されたが、司訳院から刊行された清学書が主な対象で、清から刊行された満洲文字資料の研究も行われた。第二世代の研究者たちは、この第1世代の教えを受けた研究者たちで、1950年代～1960年代生まれの人々である。代表的な研究者は崔東権(1953年生まれ)、金周源(1956年生まれ)、高東昊(1959年生まれ)、延奎東(1963年生まれ)、金亮鎮(1966年生まれ)などを挙げることができる。彼らの研究は1980年代末から現れ始めたが、研究テーマは第一世代と同様、主に満洲語文語に集中している。一つの特異な点は、この世代の研究者の一部が満洲・ツングース語の口語資料の重要性を自覚し、中国およびロシアの現地での資料収集および分析が行われたという点である。

第三世代は1970年代以降に生まれた人たちだと言えるが、その前の世代たちが主に満洲語について文献学的、音韻論的に研究したのに比べ、彼らはこの十数年間主に現代言語学の理論的枠組みの中で文法論的研究を進めてきたという点で違いがある。また第二世代に続き満洲・ツングース語の口語資料に対する分析を試みている点も特徴だ。口語資料に関する研究は、小規模ではあるが、一部の学者が政府の支援を受けて『絶滅の危機に瀕しているツングース語派の三つの言語における言語学的転写および注釈研究』という課題を行っており、今後さらに活発になることが期待される。以下では、彼らが行った研究を文語と口語に分けて各分野別に分けてみることにする。

2. 満洲語文語の研究

2.1 文献学/辞典学的研究

満洲語に関する文献学的、辞典学的研究は、大きく歴史書の対照研究と辞典類の見出し語研究に分けられ、後者は複数の清刊辞典と単数の清刊辞典に分けられる。他に朝鮮司訳院刊

行の『漢清文鑑』に関する総合的研究がある。まず、歴史書の対照研究から紹介する。

都正業 (2015a) は『満洲実録』と『満文老檔』の両方に存在する 1607 年から 1626 年までの記録を比較し、二つの文献で異なる部分があり、このうち次のような三つの『満洲実録』の特徴を記した。

- 1) 内容と文レベルの簡潔化
- 2) 意味が明らかな単語への交替または添加、単語使用の誤りの修正
- 3) 年代と叙述順序の一致

金炫廷 (2021) は清の太宗の時期を対象に『満文原檔』から『満文老檔』に改変された時期と様相を明らかにし、文字学・言語学に次のような三つの改変の意味を明らかにした。

まず、改変時期を断定的に推定することはできないが、改変が複数回にわたって行われ、有圈点字の導入の以後もしばらく無圈点字と混用された可能性が高いことを示した。そして改変の目的は『満文老檔』の書き直しのための辞典の草案を作成するための作業で、『満文老檔』の内容を精製したものである。

第二に、文字学的に見ると、『満文原檔』は無圈点満洲文と有圈点満洲文、過渡期的満洲文が混在しているが、先行研究の結果を批判的に受け入れたローマ字転写規則を提示し、無圈点満洲文が有圈点満洲文に容易に転換できるようにした。

第三に、言語学的に見ると『満文老檔』で多様な言語変化の様相が現れるが、音韻論的には満洲語固有語と漢語借用語が別様に現れることを示した。したがって、固有語では子音は b と f の混用、口蓋音化、語末位置 n の流動などが現れるが、借用語では口蓋音化が活発に反映された『満文原檔』とは異なり、『満文老檔』ではこのような現象が現れない復元形を表記しているとした。形態・統語的には単語境界の再分析を通じて二つの形態素が一つに縮約されたり、二つの単語が一つの単語に統合されたりする変化が起きた。

辞典類の見出し語研究は、複数の辞典の見出し語を比較したものと、一つの辞典の見出し語自体を研究したものに分けられる。前者は『満漢同文全書』と『大清全書』、そして『御製清文鑑』、『清文彙書』、『御製増訂清文鑑』の見出し語を比較した研究があり、後者は『御製増訂清文鑑』のみがその対象となった。

都正業 (2015a) は『満漢同文全書』(1690) の巻一に現れる見出し語を『大清全書』(1683) と照らし合わせ、『満漢同文全書』の見出し語の収録方法と満洲語の特徴を次のように明らかにした。まず、『満漢同文全書』の見出し語は a, e, i, ... wa, we を第一字頭にして am, em, im, wam, wem が第十二字頭となる一般的な順序によって配列され、独特の十二字頭順に配列された『大清全書』との違いが見られる。その他、見出し項目の配列方式、見出し語の収録基準、漢語の意味の解釈などで違いが存在する。言語的にも『大清全書』の ū の多くが o と表記され、他の辞典には現れない固有語の si 表記が現れる場合もあり、『大清全書』の -fi-, -iye- がそれぞれ -bi-, -i- と表されることもあるが、このような違いは『満漢同文全書』の満洲語が口語的・方言的な特徴を示しているのである。最後に、『満漢同文全書』は、属格標識の i が省略される場合が多いという特徴も示している。

朴相澈 (2015a) は『御製清文鑑』(1708 序)、『清文彙書』(1724)、『御製増訂清文鑑』(1771 序) の見出し語を比較し、次のような三つの結論を下した。

第一に、部類別の辞典である『御製清文鑑』では、同音異義語が各部類に含まれ、様々な

見出し語として記されているが、十二字頭別辞典である『清文彙書』では一つの見出し語の下にさまざまな意味解釈をまとめた。

第二に、『御製清文鑑』で別の見出し語ではなかった同義語と関連語が『清文彙書』では大部分独立した見出し語として掲載されている。

第三に、構成成分だけで意味の把握ができる派生語や合成語、文レベルの活用形、他の項目に置き換えられた語彙項目は、『清文彙書』では見出し語として追加されたとしても、『御製増訂清文鑑』では見出し語として掲載されなかった。

一方、崔桂英 (2017) は、『御製増訂清文鑑』で新たに収録された語形は、共通して満洲語に翻訳するか、満洲語の要素を加えることで、既存の漢語語彙項目を固有語の体制に取り入れようとしていることを明らかにした。この過程で維持する必要がある音借漢語型は漢語の要素と満洲語の要素を結合し新しい語形を誕生させた。以前、固有語として収録されていた単語のうち、否定的な感じを与えるものは否定的な語感を取り除き、多義語は語形を変えて意味を限定した単語を新たに設けたりもした。

最後に、崔桂英 (2016a) は朝鮮司訳院から刊行された多言語辞典である『漢清文鑑』の特徴を総合的に検討し、『御製清文鑑』と対照して次のような五つの独創的な編纂方式と意義を明らかにした。

第一に、外部的には、部類の名称や順序、数字が異なっており、部類の下位単位の〈則〉の内部で語を配列する順序に一定の傾向がある。内部的には、両辞典のマイクロ構造と使われた符号にも違いがある。

第二に、マクロ構造の違いは、『漢清文鑑』で見出し語 5,904 個を削除した場合と見出し語を変えた場合に分けられるが、前者は文法的基準による削除と意味的基準による削除に分け、後者は見出し語の意味を二つに分けて分割した場合、見出し語の意味的關係および階層認識による配列順序が変わった場合、理由は明らかではないが、見出し語の形式が変わった場合がある。

第三に、両辞典のマイクロ構造の類型に違いがある理由は、漢字の表意性を利用して意味記述を行い、使用者へのアクセスの利便性を図るという『漢清文鑑』の特性のためである。その他、『漢清文鑑』のマイクロ構造には様々な違いがあるが、その理由としては、『御製増訂清文鑑』に記された情報を最大限反映しながらも辞典の規模を減らそうとした点、漢語と満洲語の学習を同時に図ろうとした点が挙げられる。しかも単語を削除せずに他の見出し語のマイクロ構造の中に追加したことで、マイクロ構造が一層複雑になった。最後に、『御製増訂清文鑑』の註釈も、『漢清文鑑』で改編されたものがあるが、前者の剰余的構文を削除したものもあり、語彙情報を最大限残すために削除した項目の詮釈を残した項目の詮釈として利用したものもある。

第四に、『漢清文鑑』で新たに追加された新註は漢語の見出し語をそのまま使用した場合、対訳の語彙項目を提示した場合、解説式で提示した場合、省略した場合に分けられるが、これらはマクロ構造に依存したこと、語用論的文脈が中心となったこと、第一基点言語が満洲語であり、第二基点言語が漢語であったことが特徴である。

第五に、『漢清文鑑』は辞典学的に『御製増訂清文鑑』の影響を直接受けつつも、朝鮮の辞典編纂の伝統を継承し、漢語と満洲語の学習のための効用性を極大化したという特徴が

ある。

2.2 音韻論的研究

音韻論的研究は、漢語の満洲文表記を分析し、当時の満洲語の音韻特徴を明らかにしたものに分けられる。

金慧 (2018) は満洲文で記された資料に *di, ti, dia, tia, dio, tio* などが含まれた満洲語固有語がほとんど発見されないのは、既に満洲語が記録された以前に口蓋音化していたためと推定した。その根拠として提示したのは女真語、赫哲語、鄂温克語などの満洲語と系統が同じ言語の同根語、『満文原檔』から『満文老檔』に現れる固有名詞の表記、一部記録が残っている満洲語口語方言などの資料などである。

金慧 (2019b) は 1607 年から 1636 年までの『満文原檔』に記された 500 以上の漢語借用語の満洲文表記を検討し、漢語借用語表記に現れる満洲語の音韻現象を明らかにした。さらに、間欠的、例外的な借用語表記を通じて、当時満洲語に口蓋音化現象が拡大する過程にあることを明らかにした。

2.3 文法論的研究

満洲語に関する第三世代の学者たちの文法論的研究は、それ以前の世代に比べ量も多くなり、現代言語学理論を導入して文法を説明することによりその水準も高まったといえる。大きく分けると名詞の格標識、動詞のテンスおよびアスペクト、小詞 (*particle*) をはじめとする文法形態素の機能および統語現象、造語法などがその対象となった。

まず格標識に対する研究結果から紹介する。都正業 (2018) は対格標識 *be* を一般言語学的に分析し、従来の研究では扱われていなかった機能を取り上げた。*be* の機能を典型的な用法と非典型的な用法に分け、前者は目的語を確認したり、他の成分と区別するために付加されるものと見ており、後者は目的語ではなく文成分を確認したり区別するために付加されるものと見ている。そのため、*be* が以下の 4 つの機能を持つと述べた。

第一に、ある成分が他動詞の目的語という文法関係を表示する。この場合、話し手が特定の個体を指示体として持っているだけでなく、聞き手もそれを知る限定性 (*definiteness*) が目的語に存在する場合、項が有情性がある主語と目的語の間に重義性がある場合、*be* が必ず出現し、そうでない場合には *be* は実現しないこともあり得る。

第二に、文法関係の交替構文で他動性を示す。文法関係交替構文は形態的使役動詞構文、自他両用動詞構文、処所交替構文、所有主上昇構文、与格支配動詞構文、移動動詞構文に細分することができる。

第三に、条件関係接続文、内包文などの複合文で上位文の主語と下位文の主語が異なる場合、これを区別するために下位文の主語であることを示す。もし上位文の主語が現れないなら、このような対格主語は随意的に現れる。

第四に、話題であることを示す。この様なタイプは、全体一部分の関係で全体が話題であることを表す場合と、重なり合った同一の対象の中から一つを選んで話題であることを表す場合、後続する叙述内容について予め与えられた情報を提示するタイプに分けることができる。

続いて動詞のテンスとアスペクトに対する研究結果を紹介する。まず、朴相澈 (2015) は『御製清文鑑』(1708 序) で動詞類の見出し語の中で、末尾の形が **-mbi** である見出し語 4,366 個と **-habi** である見出し語 275 個、**-ha** である見出し語 284 個の特徴を分析した。その結果、そのような見出し語は動詞類の語幹の持つアスペクト的特性を最もよく表す語尾と結合した形態で提示されたことを明らかにした。すなわち、**-ha** 形態の見出し語の語幹は終結点があるか予備過程が短い出来事を表し、**-mbi** 形態の見出し語の語幹は終結点がないか予備過程が長い出来事を表す。**-habi** 形態の見出し語の語幹は、すでに終結した状態の継続という意味を強く表している。結果的に、『御製清文鑑』では、**-ha**、**-mbi**、**-habi** などをテンス標識ではなく、アスペクトの標識と見ているという。

朴相澈 (2017) は満洲語文法形態のうち終結の機能、連体の機能、名詞の機能を全て持つ分詞語尾である **-ra**、**-ha** と、終結の機能のみを持つ定動詞語尾である **-mbi**、**-habi**、**-mbihe**、**-ha bihe** の分布と意味を以下のように記述し、満洲語文語のテンスとアスペクト対立を以下のように確立しようとした。

*非終結形

過去	非過去
-ha	-ra

*終結形

	過去	非過去
完望アスペクト (perfective)	-ha	-mbi
非完望アスペクト (imperfective)	-mbihe	
完了 (perfect)	-ha bihe	-habi

これに対し、都正業 (2021a) は満洲語文語の複合テンス形態 **-HAbi**、**-HA bihe**、**-mbihe** は「V-Aspect + bi-Tense」と分析できると見た。その根拠は、通言語的にはもちろん満洲・ツングース語にも「動詞>アスペクト>テンス>ムード」の順に出現するという点である。すなわち、満洲語複合テンス形態 **-HAbi**、**-HA bihe**、**-mbihe** はアスペクトを表す **-HA**、**-mbi** と存在動詞 **bi**、テンスを表す **-ø**、**-he** に分析される可能性がある。

続いて、小詞についての研究を紹介することとする。都正業 (2019b) は **nikai** が **ni kai** として分離して表記される例がほとんどないこと、**ni** は疑問文と平叙文に見られるが、**nikai** は平叙文にのみ現れることから、一つの形態素と見なした。しかし、その意味は強調の意味である **ni** と確実性を意味する **kai** の結合、すなわち確実な事実を強調することである。これを情報獲得に関連づけてみると、**nikai** は、期待していなかった新たな情報を得た時の驚き、すなわち意外性を表現するとしている。

都正業 (2019c) は『満文老檔』、『三国志』、『金瓶梅』、『擇繙聊齋志異』に登場する疑問小詞 **nio** の形成と出現条件について述べた。**nio** は、歴史的に **ningge** の出現条件と類似しているながらも生産性の低い **ün** の代わりに、**ni** に生産性の高い疑問小詞 **o** が結合して形成され、言語使用者がこのように **nio** を疑問小詞として使用することで、類推によって **ningge** の出

現条件が *nio* の出現条件に加えられた結果 *ün* と *ningge* の出現条件がすべて *nio* の実現に影響を及ぼすようになったとした。

都正業 (2021b) は推測を示す小詞 *dere* が推論証拠性標識であることを明らかにした。その根拠は、間接証拠性が持つ一般的な特性のように、*dere* が主に二人称や三人称主語の文で現れるという点と、意図性、統制性、自発性を持った一人称主語と共に使われると推測や意志を表すという点である。

都正業 (2020b) は名詞化素 *-ngge* の機能を扱った。つまり、この形態素の付いた成分が文の中で項だったり、述語ではない非項の場合、*-ngge* は主に話題を表す非項成分を他の成分と区別するのがその機能であるとしている。このような非項成分は、(1)後の名詞と同じ対象、(2)述語の反復、(3)叙述対象、(4)判断の根拠、などの指示、(5)全体と部分の関係表示の5つに分類されるが、これらは全てどのような対象に対して話すのかを見せて、文の頭に位置するという点で話題を表す機能を果たすものである。

都正業 (2017) は、*seme* の三つの出現条件を示した。*seme* は(1)引用内包文、(2)引用ではないが「～としても」の意味を含む内包文、(3)引用ではないが「～としても」の意味を含まない内包文に現れる。そして(1)*seme* が現れる内包文が定形性 (finiteness) を持つこと、(2)内包文の内に疑問文が来ることができる点で、*seme* 内包文は補文句 (complimentizer phrase) である。また、*seme* が常に補文句の内包文の右側に隣接して現れるため、*seme* は補文句の内包文の核である補文素 (complementizer head) であるとしている。

朴相澈 (2021) は『満文老檔』(17世紀)、『*Ilan gurun i bithe* (三国志)』(1650) など初期満洲語の文語に現れる *tuwaci* に後行する主節述語 (以下、‘*tuwaci* 構文’) を検討し、次のような二つの特徴があるとした。

第一に、『満文老檔』の *tuwaci* 副動詞節は多くはないが、後行する主節の述語は、*-HA* の有無によって過去と非過去が区別される例もあり、そうでない例もある。

第二に、『*Ilan gurun i bithe* (三国志)』では *tuwaci* 副動詞節の主語が三人称であるときは大体主節述語に非過去テンスが使われているが、これは関連状況の現場性を強調するための筆者の戦略である。一方、主節述語に過去のテンスが使われた例は、*tuwaci* 副動詞節の主語が一人称であるものと三人称であるものに分けられるが、前者は一般的な満洲語文語のテンス体系によるもので、後者は述語が終結点を持つ動詞類である時にのみ現れる。

最後に文玄洙 (2021) は、満洲語の一次資料ではないが、E. Hauer の満独辞典の修正版に収録された約 600 語の混成語のうち、『御製増訂清文鑑』の意味解釈などを基準に誤って分析されたと判断される 43 例の類型を分析し、混成語を構成する漢語および満洲語の形成要素が抜けていることとそのような形成要素自体が間違っていることに分けて説明した。

2.4 意味論的研究

満洲語の意味論的研究は、ある意味部類に属する語彙項目の特徴を叙述する方式で行われ、品詞別には副詞と動詞に分けられる。

まず、副詞についての研究結果から紹介すると、崔桂英 (2015) は、『満漢字清文啓蒙』で『最甚語』と規定している「*umesi, asuru, dembei, mujakū, hon, jaci*」の意味解釈、被修飾語との関係、実際の文献の用例と分布状況を検討し、次のような四つの結論を下した。

- 1) 最甚語は *umesi/asuru* > *dembei* > *mujakū* > *hon/jaci* の下位系列に再び区分できる。
- 2) *umesi* は非程度性動詞の内容の完了の強調が主な意味であったが、乾隆期以降最大限の程度副詞となった。
- 3) *asuru* は主に否定文や禁止文で使用される傾向がある。
- 4) 非程度性名詞を修飾する *mujakū* の本来の意味に関する問題はまだ未解決の状態である。

文玄洙 (2020) は満洲語の方向を表す単語は大半が接尾辞が結合した派生語だと認めた上で、その接尾辞の意味を明らかにした。「-rgi」が結合したものは「向いている所、側」の意味があり、「-la/-le/-lo」と「-ri」が結合したものは「～に、～で」の意味があり、「-si」が結合したものは「-へ」の意味であることを明らかにした。また、これらの単語は方位や時間を表す意味もある。

崔桂英 (2021) は満洲語で直接移動の基準である「直示中心 (deictic center)」は話し手の位置はもちろん、聞き手の位置や物語の中心人物である第三者の位置にも拡大できると見ている。すなわち満洲語の直示移動動詞 *genembi* と *jimbi* は直示中心での遠近対立をなすが、*yabumbi* はこのような対立がなく中立的な移動を表現し、*yombi* は着点項を必須に要求しないという点で *genembi* と差があるということである。そして満洲語で *genehe* が「行ったが行かなかった状況」を表すことができるのは、語幹の意味的な要因ではなく、過去の標識 *-ha* が確定的な未来を表現するアスペクト的な機能によるものである。反面、*jimbi* が「来たが来ていない状況」を表す理由は、この動詞が結果性を含意しないからである。

2.5 通時的研究

通時的研究は文法形態素の歴史に集中している。朴相澈 (2019) は初期満洲語文語を反映すると知られている『満文老檔』および 17~18 世紀の満洲語資料を検討した結果、平叙法肯定文終結語尾 *-ra* は一人称主語のみを持ち、「聞き手に対する話し手の約束」を意味することを発見した。ところが、19 世紀半ばの満洲語小説『擇繙聊齋志異』では、*-ra* の主語制約と意味それ自体は以前と同じだが、その出現頻度は 18 世紀初めの『満文金瓶梅』に比べて大きく減った。また、『満漢字清文啓蒙』(1730) の第三巻『清文助語虚字』では、終結語尾 *-mbi* と明確に区分される *-ra* の意味を説明しているが、『新語清文接字』(1899) では終結語尾として用いられた *-ra* の用例自体が提示されなかった。

朴相澈 (2020) は 17 世紀の満洲語を反映すると考えられる『満文老檔』、『*Ilan gurun i bithe* (三国志)』、そして『*Gin ping mei bithe* (金瓶梅 (1708))』、『*Sonjofi ubaliyambuha liyoo jai jy i bithe* (擇繙聊齋志異) (1848)』に現れる *-me bi* の用例を検討し、下の表のような傾向の変化が見られることを確認した。

	『満文老檔』	『三国志』	『金瓶梅』	『擇繙聊齋志異』
「ある」	○	○	○	△
現在の習慣	○	○	×	×
現在進行	△	△	○	○
tuwaci 構文	-mbi	主に-mbi	主に-mbi	主に-me bi

○は文証されること、×は文証されないこと、△は異なる解釈が可能することを示す

崔桂英 (2016) は『御製清文鑑』で、「-bu-」と「-mbu-」が結合した見出し語を検討した結果、「-bu-」は受身接辞または使役接辞の代表といえるが、「-mbu-」は「-bu-」の単純な異形態ではなく、語彙化の程度がより強いとみている。初期の辞典類に収録された「-mbu-」の形をした見出し語が『御製増訂清文鑑』では、『-bu-』の形をした見出し語に置き換えられたのがその証拠である。その結果、『御製増訂清文鑑』に「-mbu-」という形で収録された見出し語は、拡大した意味を表現するために使われる。

3. 満洲・ツングース語の口語の研究

韓国の第三世代の学者たちによる口語に関する研究は約 10 年前から始まったが、全体的には始まったばかりの段階と言える。大きく分けると口語に対する全般的な記述、2010 年代初期の音韻論的研究、言語分化の過程を扱った通時的研究に分けられる。

3.1 参照文法 (reference grammar) 的研究

李享美 (2021) は、中国黒竜江省の興旺民族郷で使用されているソロン語のシンワン (興旺) 方言の特徴を、ホイ (輝)、ドゥラール (杜拉尔)、サマジエ (薩摩街) など他の方言との比較対照を通じて記述している。その結果を要約すると、全体的にシンワン方言は独特の特徴を多く持っているが、一部はエヴェンキ (鄂温克) 語やオロチョン (鄂伦春) 語に似ている点を見つけることができ、古形に近い文法形態や現象が維持されていて、一部はダグール (达斡尔) 語と類似した様々な現象が現れる。さらに詳しく述べると以下の通りである。

第一に、音韻論的には、シンワン方言は、音韻体系が他の方言と似ているが、u と ə/wa がそれぞれ他の方言の o と ʊ に対応する。第 2 音節以下の母音と母音調和の弱化現象が他の方言と比べて顕著に現れ、ドゥラール方言と同様に ʊ の折れ (breaking of *ʊ) 現象が現れる。しかし、子音と関連しては k > x, ʧ > s, 語中の子音連結の子音同化などが他の方言より目立たないため、最も古形をよく維持している。

第二に、形態論的には、シンワン方言は、属格標識-ŋ や方向関連格標識、人称語尾-rti など一部の文法要素の形態や機能が他の方言よりエヴェンキ語とより近い。そして対格標識や人称標識などの出現条件や制約が厳格に守られておらず、文法の単純化傾向を示す。

第三に、統語論には、シンワン方言は、ホイ方言と概ね同一であるが、アスペクトとモードを表現する補助動詞構文と、否定文の形成方法、人称不一致現象が現れる。

3.2 音韻論的研究

金慧 (2011) は 2001 年に中国で行われた現地調査 (資料提供者: 尤金玉) 資料の語彙項目

560 個、文法項目 210 個、日常会話 220 個を現代音響音声学的方法により分析し、ヘジェン（赫哲）語の音韻体系及び音韻現象を記述した。そのように設定された子音 42 個を 19 個の音素で分析し、母音 11 個を 5 個の音素で分析した。そして、母音調和、非母音化、無声母音化、子音同化、j 挿入、有気音の無気音化現象を記述した。

梁在珉 (2010) は 2005 年にロシアで行われた現地調査（資料提供者：Anna Nikolaevna Myrejeva）資料の語彙項目約 2,700 個を対象に母音のフォルマント値を測定し、次のような母音体系がエヴェンキ語に存在することを明らかにした。

i i:		u u:
ɪ ɪ:		ʊ ʊ:
ɛ	ə ə:	ɔ ɔ:
	a a:	

また、i と ɪ は後舌性の差があるが、u と ʊ は後舌性に差がないことを示し、長母音は短母音より舌の最高点が高かったが、ə と a は対応する短母音より舌の最高点が低いことを示した。

3.3 通時的研究

都正業 (2019a) は満洲語口語とシベ（錫伯）語の格標識と語尾を照らし合わせた結果、奪格標識と共同格標識から分かるように、シベ語は格標識の類似性が満洲語の文語より口語の方が大きいとした。語尾カテゴリーは口語でも文語でも満洲語とシベ語の差は大きくないが、意志を表すこともできるゼロ形態語尾、極度に単純化された副動詞語尾などは満洲語口語の特徴であり、分詞語尾-mayə/-mak と副動詞語尾-max の存在はシベ語の特徴であるとした。

都正業 (2020a) は語尾-ø が命令以外に話し手の意志も表すという満洲語口語の特徴をシベ語の文法現象と照らし合わせ、文語の願望法語尾-ki が満洲語で命令法語尾-ø と合流した可能性を提示した。つまり、満洲語文語で話し手の意志を表す-ki に対応する語尾は満洲語口語では現れず、シベ語でだけ-ki と表される。一方、両言語とも-ø が話し手の意志を表すことができるが、これは満洲語口語で-ki が-ø と合流した結果だということだ。

最後に、沈載洪 (2021) は満洲語の文語では名詞化素-ngge/ningge と分詞-hA が目的語の位置に来る動詞の語幹と結合できるが、口語では-niŋ(ŋə)のみその位置の語幹と結合できるのは-niŋ(ŋə)が漢語の影響を受けたためだと主張した。根拠として提示したのは口語が漢語と同様に SVO 語順をとることができるという点、修飾語の役割をする口語の-niŋ(ŋə)と漢語の「的」が類似しているという点である。

4. まとめ

これまで韓国の第三世代の学者たちのこの 10 年あまりの研究結果をまとめて紹介した。全般的にこの世代の学者たちは、以前の世代より量と質が豊かになり深くなったという点で、韓国の満洲・ツングース語学が発展したと言える。

しかし、残念な点もある。満洲・ツングース語を研究する学者の数が少なく、あるテーマに対する真剣である討論の雰囲気は造成されなかったという点と、ほとんど絶滅してしまった口語に対する積極的な研究がようやく始まったという点である。今後、このような残念な点が徐々に改善されることを願う。

参考文献

- [李享美] 이형미. 2021. 슬론어 상왕 방언의 특징. 서울대학교 박사 학위 논문.
- [吳愨錫] 오민석. 2017a. 『同文類解』 滿洲語 한글表記의 轉字的 性格에 대하여. 語文研究 45.4: 113-149. 한국어문교육연구회.
- [吳愨錫] 오민석. 2017b. 『동문유해』 만주어 한글 표기와 만주문자의 대응 관계 고찰 — 구별 기호가 있는 한글표기를 중심으로—. 민족문화연구 77: 477-515. 고려대학교 민족문화연구원.
- [金炫廷] 김현정. 2021. <만문원당>에서 <만문노당>으로의 개수 — 청 태종조를 중심으로 —. 서울대학교 박사 학위 논문.
- [金慧] 김혜. 2011. A study on the phonological system of Hezhe spoken in China. 서울대학교 석사 학위 논문.
- [金慧] 김혜. 2018. 만주어 표기에 반영된 만주어와 한어의 구개음화. 언어학 80: 53-73. 한국언어학회.
- [金慧] 김혜. 2019a. 《滿文原檔》의 한자음 표기에 대하여: 聲母의 표기 체계를 중심으로. 알타이학보 29: 1-25. 한국알타이학회.
- [金慧] 김혜. 2019b. <滿文原檔>의 차용 표기에 나타난 만주어와 한어의 음운 현상 연구. 서울대학교 박사 학위 논문.
- [沈載洪] Shim Jaehong. 2021. A study of the influence of Mandarin Chinese on Spoken Manchu. 알타이학보 31: 85-105. 한국알타이학회.
- [崔桂英] 최계영. 2015. 만주어 정도부사 最甚語 연구. 언어학 71: 83-111. 한국언어학회.
- [崔桂英] 최계영. 2016a. <漢清文鑑>의 사전학적 연구. 서울대학교 박사 학위 논문.
- [崔桂英] 최계영. 2016b. On the passive or causative suffix *-mbu-* in Manchu: Focused on the headwords in dictionaries. 알타이학보 26: 45-62. 한국알타이학회.
- [崔桂英] 최계영. 2017. 《御製增訂清文鑑》 신규 표제어 연구. 알타이학보 27: 25-50. 한국알타이학회.
- [崔桂英] 최계영. 2021. 만주어 직시 이동 동사의 특성. 언어학 89: 29-60. 한국언어학회.
- [都正業] 도정업. 2015a. 《滿文老檔》과 《滿洲實錄》의 만주문 대조 연구. 알타이학보 25: 1-35. 한국알타이학회.
- [都正業] 도정업. 2015b. 《滿漢同文全書》의 표제어 연구 —《大清全書》와의 대조를 중심으로—. 언어학 73: 35-57. 한국언어학회.
- [都正業] 도정업. 정한별. 2017. 만주어 내포문에 나타나는 *seme* 의 문법적 지위. 동양학 69: 13-31. 단국대학교 동양학연구원.
- [都正業] 도정업. 2018. 만주어 격 표지 *be* 의 기능 연구. 서울대학교 박사 학위 논문.

- [都正業] 도정업. 2019a. 만주어 구어와 시버어 구어의 문법 대조 —격 표지와 어미를 중심으로—. 동양학 77: 185-206. 단국대학교 동양학연구원.
- [都正業] 도정업. 2019b. 만주어 첨사 *nikai* 와 의외성의 관계. 알타이학보 29: 27-47. 한국알타이학회.
- [都正業] Do Jeongup. 2019c. Influence of Analogy on Innovation of an Interrogative Particle in Manchu. 언어학 85: 3-27. 한국언어학회.
- [都正業] 도정업. 2020a. 만주어 구어 원방법 어미 변화의 한 양상 —시버어 구어와 대조적 관점에서—. 알타이학보 30: 35-53. 한국알타이학회.
- [都正業] 도정업. 2020b. 비논항 성분에 붙은 만주어 명사화소 *-ngge* 의 기능 —『滿文老檔』의 용례를 중심으로. 인문논총 77.1: 321-355. 서울대학교 인문학연구원.
- [都正業] 도정업. 2021a. 만주어 복합 시제 형태 분석 —만주-통구스 언어의 복합 시제 형태와 관련하여—. 동양학 84: 85-112. 단국대학교 동양학연구원.
- [都正業] 도정업. 2021b. 언어 유형론적 관점에서 본 만주어 첨사 *dere* 의 추론 증거성 표지로서의 특성. 인문논총 78.1: 187-220. 서울대학교 인문학연구원.
- [朴相澈] 박상철. 2015a. 《御製淸文鑑》 동사류 표제어의 상부류. 언어학 73: 133-156. 한국언어학회.
- [朴相澈] 박상철. 2015b. 《御製淸文鑑》, 《淸文彙書》, 《御製增訂淸文鑑》의 표제어 비교: *a sere hergen* 에 한정하여. 알타이학보 25: 37-58. 한국알타이학회.
- [朴相澈] 박상철. 2017. 만주어 문어의 시제와 양상 연구 —〈滿文老檔〉의 용례를 중심으로—. 서울대학교 박사 학위논문.
- [朴相澈] 박상철. 2019. 만주어 문어의 문법 변화 종결어미 *-ra* 의 분포와 의미를 중심으로. 알타이학보 29: 49-74. 한국알타이학회.
- [朴相澈] 박상철. 2020. 만주어 문어 *-me bi* 의 의미 변화. 언어학 87: 35-62. 한국언어학회.
- [朴相澈] 박상철. 2021. 만주어 문어 *tuwaci* ‘보니’ 구문의 특이성. 알타이학보 31: 27-50. 한국알타이학회.
- [文玄洙] 고경재, 남향림, 문현수. 2020. 만주어 방향어의 의미확장 연구 —『御製增訂淸文鑑』의 만주어 뜻풀이를 중심으로—. 인문학연구 45: 53-94. 경희대학교 인문학연구원.
- [文玄洙] 남향림, 문현수, 고경재. 2021. 『만독사전』(2007)의 만주어 혼성어 분석 오류 고찰 —『어제증정청문감』의 뜻풀이를 중심으로—. 민족문화연구 92: 41-84. 고려대학교 민족문화연구원.
- [梁在珉] Yang Jaemin. 2010. An acoustic analysis of Ewenki vowels. MA thesis. Seoul National University.